

bjリーグのボランティアの活動継続意欲に関する研究

スポーツビジネス研究領域

5007A004-1 磯谷美穂

研究指導教員： 木村和彦教授

【研究の背景】

スポーツに関わるボランティアは「スポーツ・ボランティア」と呼ばれ、「するスポーツ」や「見るスポーツ」と並んで、「支えるスポーツ」としてスポーツの振興に果たす役割が期待されている。スポーツ・ボランティアはこれまで、地域におけるスポーツクラブや団体、国際競技大会などが主な活動の場であったが、近年スポーツのプロ化、事業化を目指すリーグの発足が相次いでおり、新たな活動の場が広がっている。

日本初のプロバスケットボールリーグであるbjリーグは、地域に密着したコンパクトな経営を目指しているため、チームには地域での支持基盤の拡大とコストの削減により、安定した経営が求められる。そのためbjリーグのチームにとって、ボランティアの果たす役割は大きく、彼らからの継続的な支援を得る必要があると考えられる。

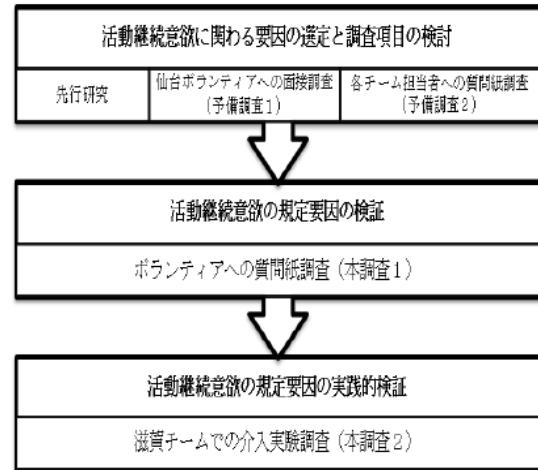
したがって本研究では、ボランティアからの支援の安定性に注目し、bjリーグのボランティアの活動継続意欲に影響を与える要因を検討することとした。

【研究の目的】

本研究の目的は、bjリーグの各チームにおけるスポーツ・ボランティアを対象に、ボランティアの活動継続意欲に影響を与える要因を明らかにすることである。

【研究の方法】

本研究の目的を達成するため、図に示したような研究の枠組みを設計し、具体的な調査を実施した。



図：研究の枠組み

まず、活動継続意欲に関わる要因の選定と、本調査における調査項目の検討を行うため、先行研究の考証と、仙台89ERS のボランティアおよび各チーム担当者に対してそれぞれ予備調査1、予備調査2を実施した。これにより選定された要因をもとに調査項目を作成し、本調査1において各チームのボランティアに質問紙調査を実施した。

次に、本調査1のサンプルから活動継続意欲に関わる変数の抽出を行い、さらにそれらのうち活動継続意欲に規定力を持つ要因の検証を行った。

さらに、抽出された活動意欲への影響が考えられる変数のうち、マネジメントが可能なものについて、分析結果と実現可能性を考慮し、実験にて介入する要素を決定した。これにより、活動継続意欲の規定要因の実践的検証を試みた(本調査2)。

本調査1 の調査期間は、2008 年11 月から2008 年12 月までの試合開催日で、切手を貼付した質問紙を各チームの担当者に送付し、活動に参加したボランティアへの配布を依頼した。合計179 部を配布し、回収数は102 部(回収率57.0%)、有効回答数は99 部(有効回答率97.1%)であった。

本調査2は2008 年12 月13 日(土)・14 日(日)の2日間に、滋賀レイクスターズの会場にて活動に参加し

たボランティアを対象に実施した。介入する要素を「選手との交流」とし、試合終了後にボランティア全員が集合する場において、数名の選手が活動に対してのお礼や感謝の言葉を伝え、ボランティア全員に握手またはハイタッチをしていくという機会を設けた。その後本調査1と同じ質問紙を配布し、1日目6部、2日目20部の計26部(有効回答率100%)を回収した。

【結果と考察】

まず、本調査1のサンプルについて、参加動機、満足、組織コミットメントから、活動に関わる変数として、表の12変数を抽出した。

表：活動継続意欲に関わる変数

参加動機		選手・スタッフ交流動機
		利他・地域貢献動機
		自己成長動機
		社会交流動機
		自己承認動機
満足	活動満足	スタッフ交流満足
		自己効用感満足
		ボランティア集団性満足
	施策満足	選手交流満足
		感謝・活動サポート満足
		活動情報発信満足
組織コミットメント		組織コミットメント

選手・スタッフ交流動機利他・地域貢献動機自己成長動機社会交流動機自己承認動機スタッフ交流満足自己効用感満足ボランティア集団性満足選手交流満足感謝・活動サポート満足活動情報発信満足組織コミットメント参加動機組織コミットメント施策満足活動満足

次に、抽出された12の変数と活動継続意欲について、ピアソンの相関分析を行った結果、利他・地域貢献動機、自己効用感満足、組織コミットメント、選手・スタッフ交流動機、スタッフ交流満足、ボランティア集団性満足の6変数について、活動継続意欲に対する有

意な相関が見られた。

さらに、この6変数を独立変数、活動継続意欲を従属変数として重回帰分析を行った結果、組織コミットメントのみについて標準偏回帰係数に1%水準で有意性が見られた。

これらの分析の結果と実現可能性を考慮し、活動継続意欲と相関のあった「選手との交流」という要素への介入を決定して、実験(本調査2)を行った。

本調査1での滋賀のサンプルと本調査2のサンプルについて、活動継続意欲に関わる変数の平均値の差を分析した結果、本調査2のサンプルの選手交流満足の値が有意に高く、実験の効果によるものと推測された。また、活動継続意欲を含む他の12変数のうち、統計的に有意ではないが、10変数について本調査2のサンプルの値が本調査1の滋賀のサンプルに比べて高かった。

【まとめ】

本研究では以下のことが明らかになった。

- ① 相関分析の結果、選手・スタッフ交流動機、利他・地域貢献動機、スタッフ交流満足、自己効用感満足、ボランティア集団性満足、組織コミットメントの6変数において、活動継続意欲との有意な相関が見られた。
- ② ボランティアの活動継続意欲に最も強い影響を与える要因はチームへの組織コミットメントである。
- ③ 介入実験前後の比較の結果、選手との交流に関わる満度が統計的に有意に高く、さらに、統計的に有意ではなかったが、活動継続意欲を含む残りの12変数中10変数が介入実験後に高い値を示した。